

ミラクルラッキー・バス

[路線バスの奇跡]



米田豊穂

はじめに

高校卒業後、ある地方のバス会社に就職し路線バスだけで定年を迎えた男の小さな夢と小さな悩みごとを持った毎日乗る乗客達の何か共通点が遭遇したラッキーな奇跡の物語。

ミラクルラッキーバス

米田豊穂

今日は最後の業務だ、もう六十五歳、定年退職して五年、今日で終わり、まだまだ行けるぜ、どこも悪くは無いぜ、おーいさわやかな空気、今日の朝はなんて気持ちのいい朝だ、なのに今日で終わり、ハンドルもシッカリ持てるぜ、クラッチも、ブレーキだって、右足はぎゅっと踏めるぜ、涙が出るぜ、まだまだやりたい、十八で始めた夢に見たバスの運転手、最初はバスの教習、なかなか乗れなかったけど夢があった、ここは地方のバス会社、赤字に近い経営を続けてもう五十年になる、なんとか四十七年やって来た、バス会社が出来て三年目に入社、バスなんてピッカピカ、毎日磨いたぜ、バスガイドもいた、可愛い子ばっか、ばかじゃないけど、紺の制服可愛かったな、帰りは喫茶店に今日はあいちゃん、明日はよっちゃん、みんなでアッチコッチ行ったぜ

ハイキング、サイクリング、飯盒炊さん、楽しかった青春時代、バスガイドと車内結婚だぜ、字が違うけど、いつの間にかバスガイドがいなくなって、ワンマンバスだ寂しくなった、頭もさみしいけど楽しい思い出ばかりだ今日で終わりか、山下登、真っ白な手袋をはめ、アイロンのきいた白い半袖の制服を着、制帽は額を出してかぶって、運転席でハンドルに手をやり、フロントガラスから見る初夏の青空に向いて郷愁にふけていた、ドタバタとギターケースを持った男女二人が早朝のバスに乗って来た、最後尾の席にギターケースを横に置き並んで座った

「どうすんだよ、これから」

目立たないと言ったら申し訳ないが細身でセミロング、チョット茶色、色白、細面でひ弱な未成年風の彼氏が彼女にぶっきらぼうに言った。

「どうすんだよって言っても、いつも勝手なんだから、もっと早く並んでたらこんな事に成らなかったのに」

彼女はいつもの調子で反応していた、内容は分からないが、いつもの変わらない二人だった、今度はお年寄り夫婦で相変わらずいつも同じバス停で降りて何処へ何しに行くのやら、一度お話ししたいご夫婦だ、山下登は同じ時間同じお客さんをもうそんなに深くは知らないが、何となく違和感もなくいつものようなルームミラーで眺めている、もうすぐあの子が乗って来るんだ、可愛い高校生の子が、ほらほらやって来た、しとやかで愛らしくいつもの左側の前から三つ目の席に、この歳で、恥ずかしいが、孫位の年頃だと思う、自分にはまだ孫がいなが、何故か可愛い、自分は長男次男長女がいるがまだ結婚しておらず皆んな一人暮らしで都会に住んでいる、長男は製薬会社に勤めたまに帰って来て、よく二人で、買って来てくれた地方の地酒を飲み交わす、もう三十六にもなって彼女がいない、口には出さないが寂しいと思う、しかし、案外今時の若者は

どうって思っていないみたいだ、けれども早く結婚して欲しい、次男は貿易会社に勤めこれもまたのんきに構えている、長女はもう二十六、彼氏がいるらしく彼氏の話の家内をとうして話す、見たい気持ちはあるがなんか会うのが怖い、ぱっぱと結婚して孫でも産んだらいいんだけど、そうはいかんか、まあ皆んないい子だ、うちは家内と二人、青春時代に逆戻り、なーんてね、

「山下、バスカード二千円のやつ余ってない、持ってたなら三枚ちょうだい」

同僚の斎藤だった、彼は今年の暮退職する、自分のバスの前に発車待ちしている、

「あーいいよ、この便で終わりだから、斎藤、頑張れよ、こんなところで、こんな話、もう終わりだなぁ、さようなら」

「さようならなんて、いつでも遊びに来いよ、またな」

こんな会話何百回、何千回さようなら。

今度は、いつもしかめっ面の五十過ぎか、サラリーマン風でカバンの中身をいつも確認している

今日も足取り重いなあどんな仕事しているの、左側の前から三番目ため息つきながらドッスン、そこは二人席だけどお客さん少ないからいいよ、あ、来た、いくつだろうまだ若いと思うんだけど少し綺麗な奥さん風左側の前から四つ目、そこも二人席だけどいいぜ、ちょっと空白の時間、老人夫婦の会話と後部座席の若もんの声が流れる、あのにいちゃん来ないな、どうしたんだろう、いつもの席が空いてる、

「七時十分発JRみんなの動物園行、後一分程で出発です」

ここは旭ヶ丘発みんなの動物園行、帰りは空便で業務終了、みなさん何処へ行くんだろう、いつも不思議に思う、動物園まで四十分、途中で停留所が四つしかなく夕陽ヶ丘高校前、機械団地前、健康総合病院前、天国火葬場前、だけでこの時間誰も途中から乗ってこない、もうずうっとこの路線ばかり二十年、昼からの帰り便はお客さんは乗って来る、一日三往復

皆んな知った顔もう終わりだなあ、あ！遠くから、あのにいちゃんだ、走ってる

「運転手さんまだ、出ないの」

そんなに急いでる訳でも無いのに人に厳しい若もんだ、

「はい、もう直ぐ出ます」

にいちゃんが急ぎ足で乗り込んだ、今日は珍しくギリギリ、どんな仕事だろういつも黒い背広姿
中肉中背、人の良さそうな青年だ、左側の前から四つ目、

「お待たせしました、出発します、いつもご乗車ありがとうございます、みんなの動物園行き
です、バスが揺れますのでご注意願います、本日の運転、山下です、安全運転でまいります」
山下は右指示器を出し大きなハンドルを回しながらバスの周り全体を確認し発車させた、前に発
車待ちしている同僚の斎藤に会釈して出発した最後のバスで、『次は夕陽ヶ丘高校前、木下自動
車整備はこちらでお降りください』

女性の声で自動音声案内が車内に流れる、今まで四十七年、無事故無違反毎日同じ運転業務だけど毎日が何故か違う、変化がある、だからやって来たんだ、高校前まで二十分もある、いま山下は前から考えていた計画を今この時実行しようとしていた、何をするんだ、何を企んでいるんだ山下！山下は初夏の青空の下少し汗ばみかけた、ハンドルを握ってる手が微妙に震えている、真面目一筋、気の弱さもあってか通常業務以外の行動は初めての為動揺している、車内マイクを取ろうとするが、ためらった、気を取り戻し、再度マイクに目をやった、よしやったるで一、

まだ執筆中です

ラッキー・バス

<http://p.booklog.jp/book/20604>

著者：米田豊穂

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/toyoho/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/20604>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/20604>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.